

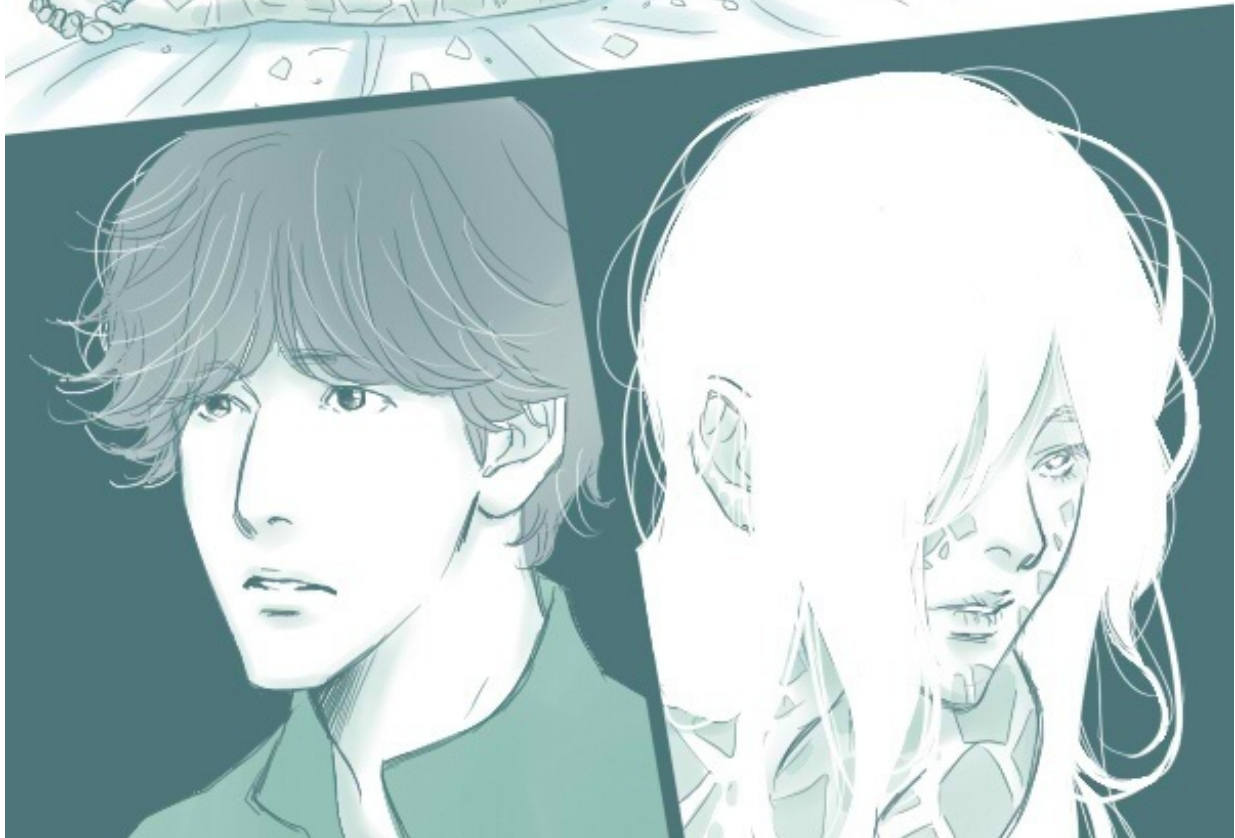


# 水晶花

---

小野達海

---



末京。その世界は、完全にオス達がメスに支配された世界。オスは、緑色のワンピースのような囚人服を着て労働者となっていました。

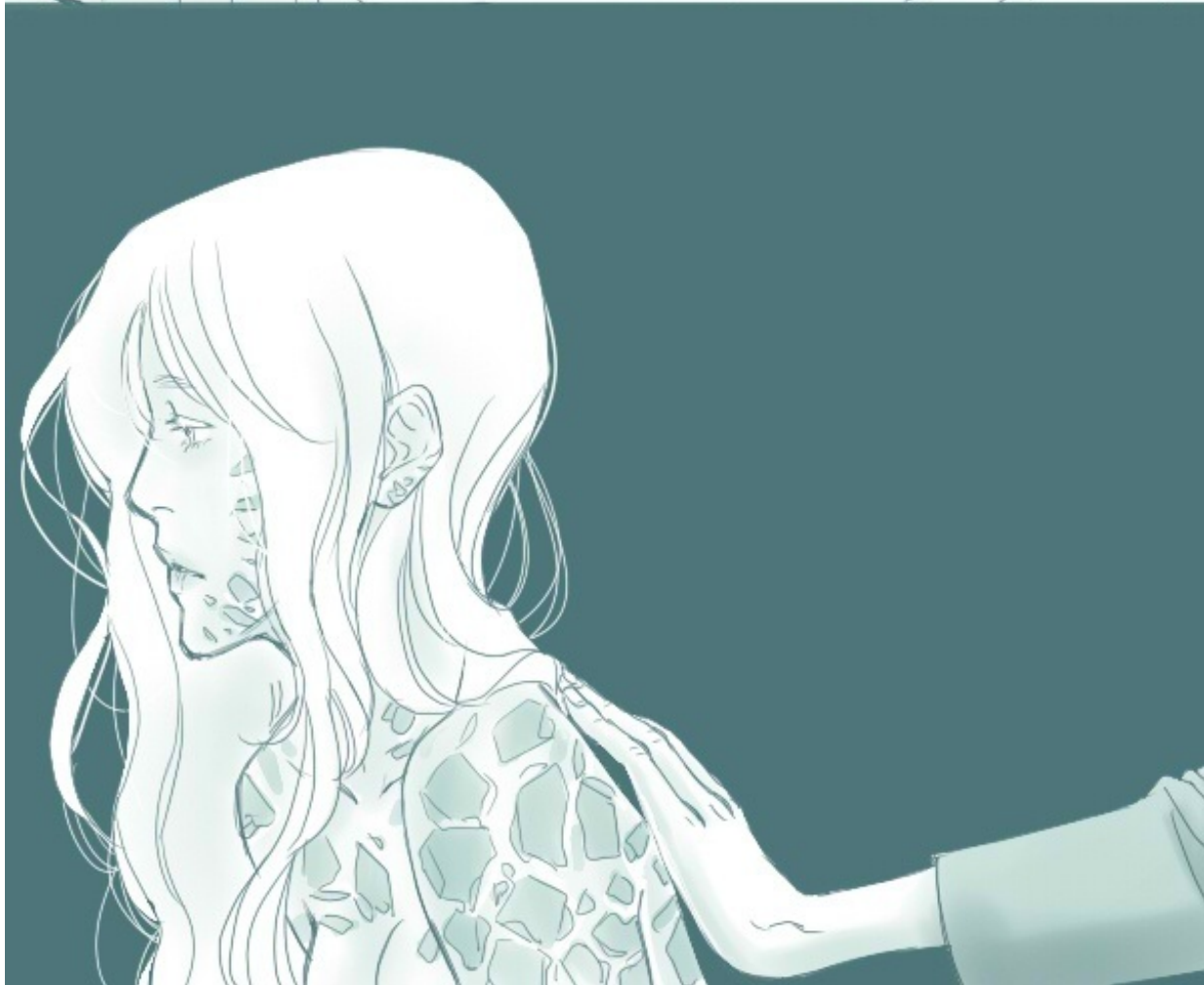
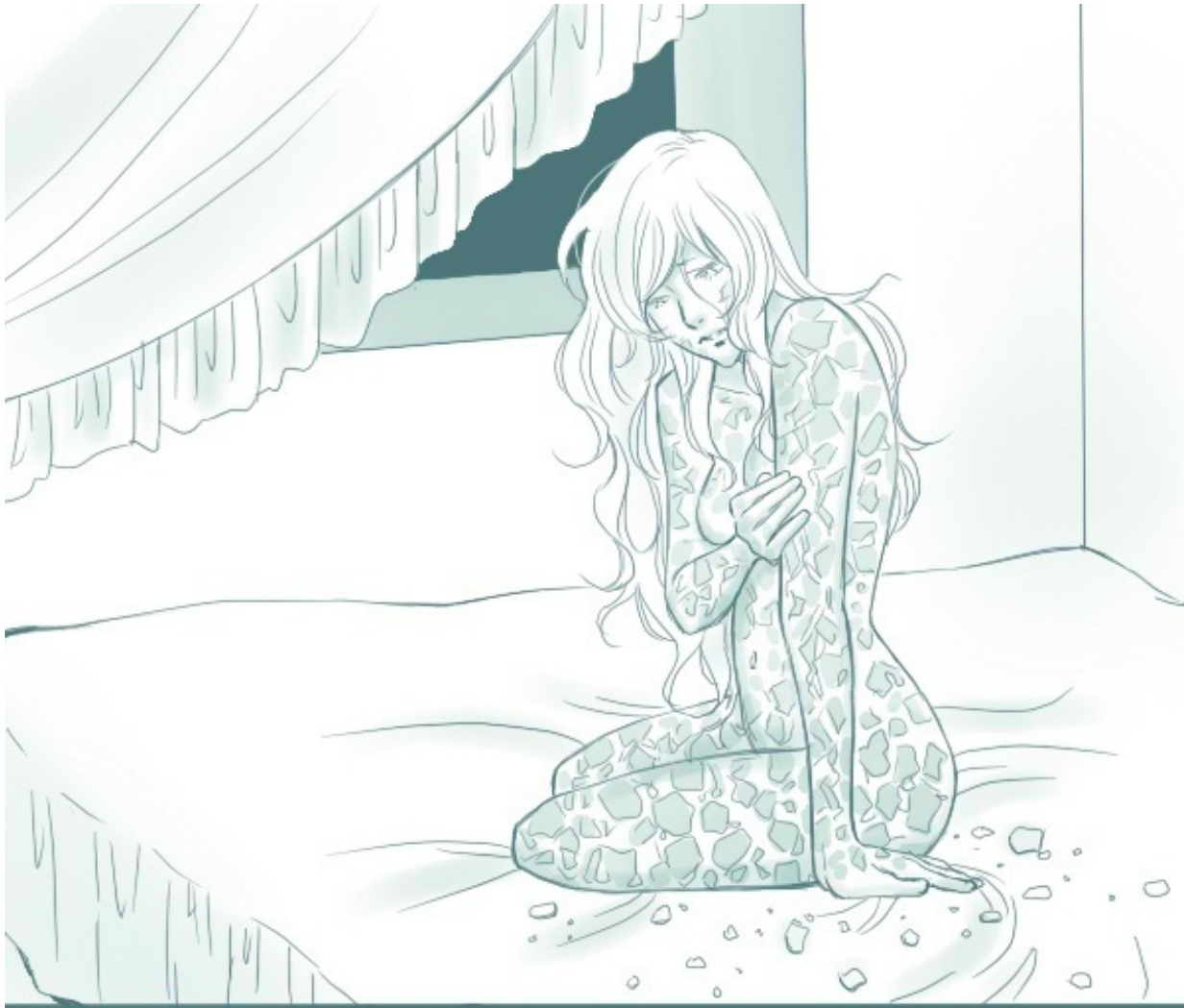
これは、オルガティカ職人のオスと、罅割れた皮膚を持ったメスの話。

罅割れた皮膚のメスは、その身体の激痛に悩まされていました。皮膚の表面が固く乾き、罅割れ、動くともるで皮膚を無理に剥がされるような、激しい痛みを伴うのでした。

いつものように彼女が伏していると、そこに一人のオスがやってきました。

「...誰？工場の人？」

「ボクはオルガティカの職人です。あなたに薬を作ってみました」



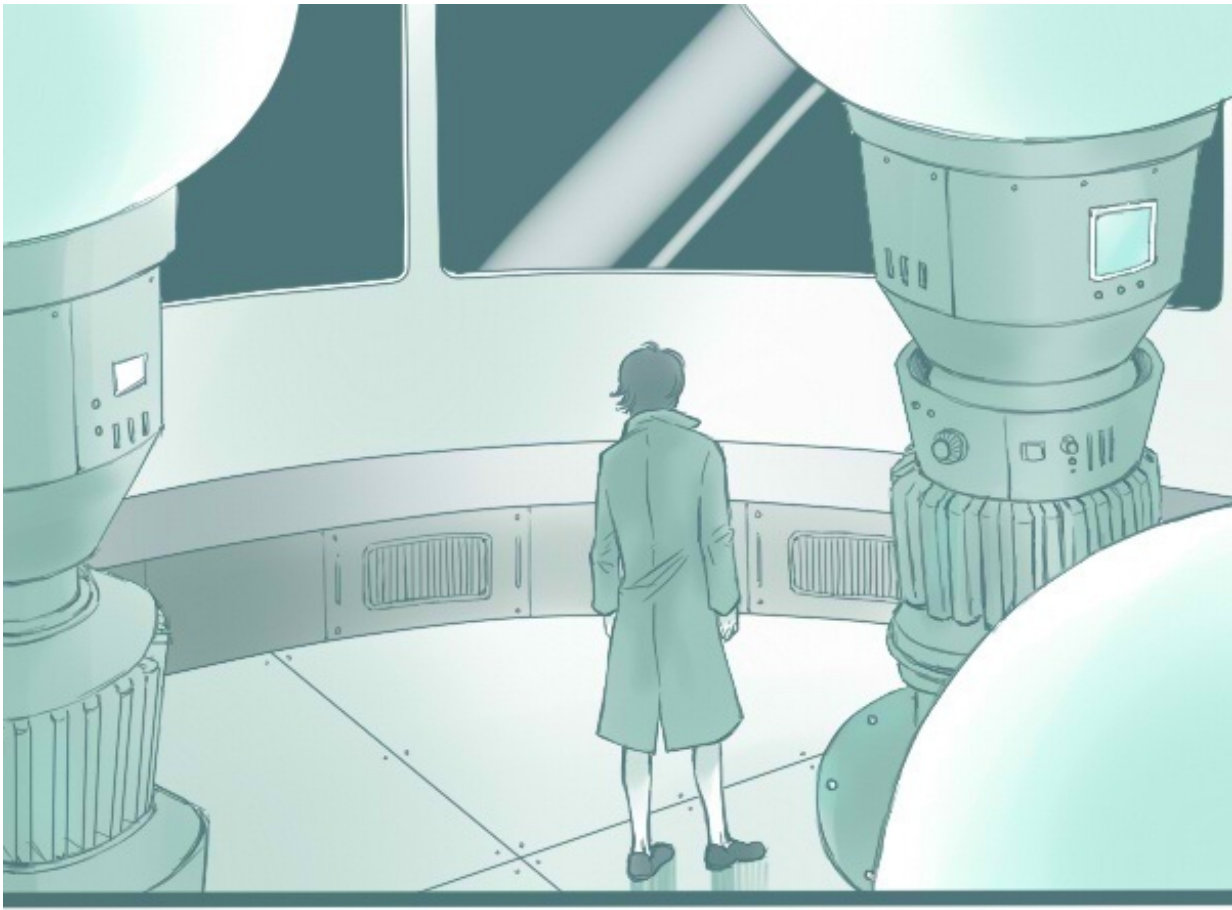
「ありがとう。でも、自分ではあまり動けないのよ」

彼女が動くと、微かに皮膚がめくれる音が「ボク」の耳に聞こえてきました。

「痛くて」

それなら、と「ボク」がメスの背中に薬を塗ってあげることにしました。

この世界でのオスは、全て情欲の雷管を奪われており、メスにとって安全な存在でした。メスはまるで自分であるかのように彼を受け入れ、身体を預けました。



ガラスの子宮、オルガティカ・マシーンを動かせるのは、ごく限られたオスだけでした。彼らは「職人」と呼ばれ、末京の労働用のオスのクローンを作るのが仕事でした。

その子宮を使って、「ボク」は薬を作ってみたのです。

「ボク」はメスの為にまいにち薬を塗りにやって来ました。

けれども、オルガティカの技術を駆使して作ったどんな薬も、彼女の皮膚を戻すことは出来なかったのです。それほどメスの病は深いものでした。





全てを諦めてしまったような口調でメスが呟きました。

「ありがとう。もういいのよ」

乾いた唇にのせた言葉は、「ボク」にとって残酷なものでした。

彼女の罅割れた皮膚は、自らの涙で一瞬だけ潤いました。

「もういいのよ」

それは許せない、と「ボク」は思いました。

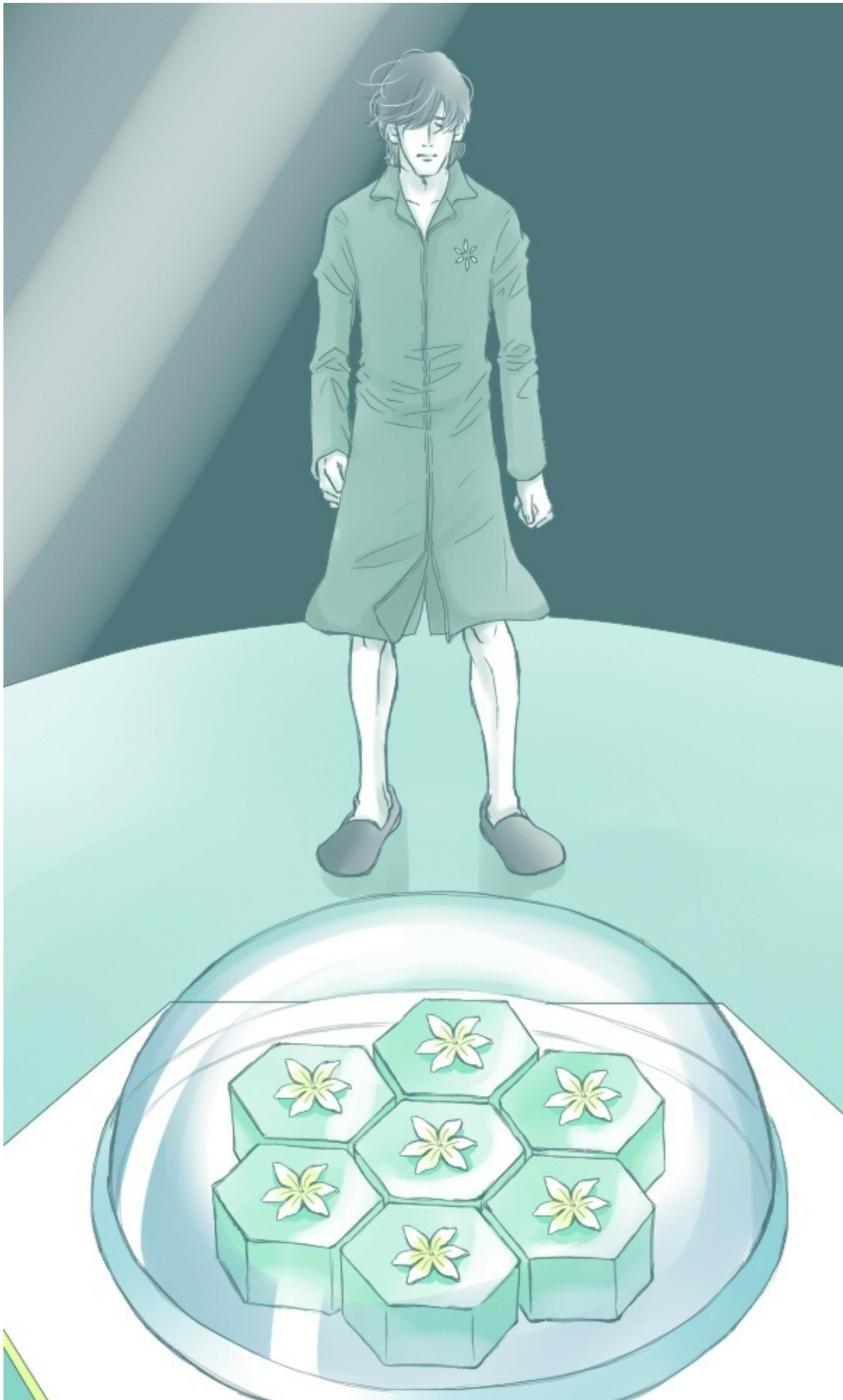


「ボク」はメスを抱きしめて言いました。

「それならいっそ、君の身体を花にしてあげる。ボクが綺麗な花を咲かせるよ」

メスは、それを受け入れました。

この苦しみから逃れて、「ボク」の手によって静かな花になるのは、今よりずっと、幸せに思えたのでした。



メスは「ボク」が居る限り、枯れることはありませんでした。

「ボク」はその花を「水晶花」と名付け、いつまでも綺麗な花を咲かせました。